

## バーチャルウォーク

松尾芭蕉とあるく「奥の細道」 600里 750日

### その3 鳴子尿前～酒田

八柳 修之

平泉を北限に5月14日（陽暦6月30日）、一関を発って同日岩出山、15・16日堺田と泊りを重ね、尿前（しとまえ）より山刀伐峠（なたぎりとうげ）の険路を越えて、17日尾花沢に着くまでの道は、実際の旅程の上でも「道の奥」より「出で端」（出羽）へと奥羽山系を横断する大きなヤマ場にあたっていた。

岩出山 5月14日 江戸から786.5km 一関から50km 私の記録： 年 月 日

鳴子 尿前関（しとまえ） 江戸から810.5km 岩出山から25km

私の記録： 年 月 日

北のかた南部へと続く街道を遙か眺めやりつつ、道をとって返し、岩出の里に泊まる。

さらに鳴子の湯から尿前（しとまえ）の関、いよいよこれより出羽の国へ越えようとする。この道は、旅人の滅多に通らぬ所なので、関所の番人に不審を受け、やっとのことで関を越える。日も暮れて、国境を守る番人の家を目当てに尋ね一夜の宿泊を頼んだ。ところが、ここで日も風雨が吹き荒れて、何の由緒も見ものもない山中に逗留することとなった。これまでの旅では最悪であった。



#### 蚤虱（のみ しらみ） 馬の尿（ばり）する 枕もと

注釈：蚤、それに虱。おまけに暗がかりの中で馬の小便する音までが、眠られぬ枕元に近ちかとひびいてくる。なんとも侘しくおかしな目にあつたものだ。

尿前（にょうまえ）とは、変な名前である。義経一行が平泉に落ちのびる際に通ったともされ、義経が連れて来た子供がここでおしっこをしたという言い伝えがある。

尾花沢 5月17日～27日 江戸から849.5km。尿前から39km

私の記録： 年 月 日

尾花沢で清風という者を尋ねた。裕福な人ではあるが、富者にありがちな心躁りのいやしい人物ではない。都にもたびたび往来しているだけあって、旅のこころもよくわきまえているので、幾日も引き留めて長旅の労をもてなしてくれた。

#### 涼しさを わが宿にして ねまるなり

注釈： 富貴にして青閑の涼を楽しんでいるあるじ清風の心根のほども偲ばれるこの座敷の涼しさをわが物顔にあるじの好意にまかせ、のうのうと安座する次第だ。

#### 眉掃きを おもかげにして 紅の花

注釈： やがては女性の唇を彩る最上地方特産の紅粉花。そういえば、その花の形も、女性が化粧に使う小さな刷毛（はけ）、あの眉かきの形を彷彿と思ひ浮かべさせる、なまめかしくも優しい感じを漂わせて咲いている紅粉の花よ。



立石寺 5月27日 江戸から891.5km 尾花沢から30km 私の記録： 年 月 日

山形領内に立石寺という山寺が有る。慈覚大師のお開きになった寺で、格別青閑の地である。

一度行って見るがよいと人々が勧めるので、尾花沢から予定とは逆方向に引き返し立石寺に向かったが、その間7里ばかりであった。麓の宿坊に宿をとり、山上の僧堂に登る。岩に巨岩を重ねて山としたような地

形で松や柏も年数を経、土や石も時代がついて苔が滑らかに覆い、岩上に建てられた多くの支院はみな扉をしめ切って、物音一つしない。

### 閉かさや 岩にしみいる 蟬の声

注釈：何という静けさ。ふと気が付けば、この静寂の中で蟬の鳴き声のするのが、あたかも四圍の苔むした岩石の中へとしみ透ってゆくような気がする。あたりの静寂はいっそう深く、自分の心も澄み切って、自然の生命の中へと溶け込んでゆくかのようだ。



最上川 大石田 5月29日 江戸より929km 立石寺より37.5km 私の記録 年 月 日

立石寺の宿坊に一泊後、最上川を舟で下ろうと、大石田という所で天気の良いのを待つ。最上川は陸奥に源を発し、山形領を川上としている。基点（ごてん）、隼などという恐ろしい難所もある。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。

### 五月雨を 集めて早し 最上川

注釈：この日ごろ陸奥・山形の山野に降り注ぐ五月雨を集めて水量を増し、水勢いよいよ急に流れ下ってゆく。なんと豪壮な最上の急流よ。



新庄 6月1日 江戸より971km 大石田より42km 私の記録： 年 月 日

清川 6月3日 江戸より1,000km 新庄より29km 私の記録： 年 月 日

元合海という所から船で最上川を下り清川に上陸、羽黒に向かった。

羽黒山 6月3日 江戸より1,016km 清川より16km 私の記録： 年 月 日

6月3日、羽黒山権現別院、4日、本坊にて俳諧興行。 ありがたや 雪をかをらす 南谷

注釈：ああ尊くも有難いことよ。この南谷の別院には、下界の暑気をよそに、真夏の南風が霊山の残雪の香をかおらせて、清浄の気がみなぎっている。

5日、羽黒権詣に参拝。 6日、月山登山 7日、湯殿山へと下り、夕刻、南谷に帰る。

### 三山（羽黒山・月山・湯殿山）巡礼の句

#### 涼しさや ほの三日月の 羽黒山

注釈：忍び寄る夕闇の中で木立の陰も黒々と静まり返った羽黒山の上に、三日月が淡く浮かんでいるのがほのかに見える。いかにも神秘的な、心の中も清く涼しくなるような眺めだ。

#### 雲の峰 いくつ崩れて 月の山

注釈：盛夏の炎天に空高く立ち上っていた雲の峰が、いくつも崩れて、この月光に照らされ雲間に神々しくそびえ立つ月山となったであろうか。まことに天の一部が崩れて地上に築き上げたかと思われるばかりの雄大森厳な山の姿である。



### 湯殿山 銭踏む道の 涙かな 曾良

注釈：湯殿山では地へ落ちたものを拾ってはならぬ掟で、地上におびただしく落ち散った賽銭の上を踏んで参詣するにつけても、この霊山の超世間的な汚れのない尊さに思わず銭ならぬ感涙が落ちるのだった。



羽黒山



月山



湯殿山

三山巡礼には、今日一般の観光旅行とは違った宗教的意味があり、山中の微細については他言を禁じた行者の掟に従ったものである。

**鶴岡 6月10日 江戸より 1,091km 羽黒山より 75km 私の記録； 年 月 日**

芭蕉は6月10日、羽黒滞在を切り上げて、馬で鶴岡の長山重行邸に着いたが、三山巡礼の疲れがこたえたらしく13日川船で酒田に下った。

**酒田 6月13日 江戸より 1,116km 鶴岡より 25km 私の記録； 年 月 日**

酒田では淵庵不玉という医師のもとを宿とした。

### あつみ山や 吹浦かけて 夕涼み

注釈：おりからの暑気に、その名も暑さと緑のあるあつみ山。頭をめぐらせば、暑さを吹き払う涼しげな名の吹浦が見える。そのあつみ山から吹浦へかけての眺望を一望に見渡しながら夕涼みをするとは、なんと、しゃれたことだろう。

### 暑き日を 海に入れたり 最上川

注釈：赤い夕日が海に沈もうとしている。暑い一日を、大河の水に浮かべて海に流し入れてしまったのだ。流れ終えた最上川の河口のあたりからは、涼しい夕風が立ち始めている。

夕涼みの句、いずもほっと一息入れている芭蕉の小休止の姿が浮かぶ。酒田は北前船の港として賑わったところである。酒田の本間家は、本間様にも及びもせぬが、せめてなりや殿様にと言われたほどの豪商であった。戦後の農地解放で土地を失った。ホンマゴルフは有名である。



酒田港の夕日 日本の夕陽百景



酒田湊の倉庫群



吹浦の海岸

**吹浦 6月15日 江戸より 1,141km 酒田より 25km 私の記録： 年 月 日**

15日朝、芭蕉一行は酒田を発って、昼に吹浦に着く。16日吹浦発、夕刻、象潟雨景見物。

**象潟 6月16日 江戸より 1154km 吹浦より 13km 私の記録： 年 月 日**

これまで山水海陸の美景のある限りことごとく見集めてきて、今や象潟に対し誌心を悩ます次第となった。酒田の港から東北の方へ、山を越え、磯浜を踏んで、その間10里、日もようやく傾きかけた頃、着いてみると夕風が砂を吹き上げ、雨は朦朧とうちけぶって、鳥海の山々も隠れてしまっている。

### 象潟や 雨に西施が ねぶの花

注釈：象潟は雨に朦朧とうちけぶり、その中からかの美人西施（せいし）の憂いに目をとぎした悩ましげな佛（おもかげ）がそぞろに浮かんでくるような感じがされたが、西施の佛と見たは、実は岸边の茂るねむの花の雨にそばぬれた姿であった。西施は中国四大美人の一人、呉を滅ぼしたといわれる。

17日、天気は晴れ上がって象潟に舟を浮かべ、真っ先に能因島に舟を漕ぎよせて、能因法師が隠棲



した遺跡（能因島）を尋ねた。



能因法師が三年隠棲した能因島



西施



干満珠寺



ぬむの花



芭蕉は象潟を松島と対比し、松島は笑うがごとし、象潟は恨むがごとしとも言っている。芭蕉が訪れた当時は象潟は松島のように海であったが、文化元年（1804）の象潟地震で海底が隆起して陸地化してしまった。現在でも 102 の小島が水田地帯に点在する。筆者は高校時代、田植えの季節に行ったことがあるが、当時の様子を偲ぶことが出来た。

能因法師： 998～？ 平安時代の歌人。「世の中に かくても経けり きさかたの あまの苦屋を わが宿にし」 能因法師は象潟には行っていなかったという説もある。

西行法師 1118～1190 平安末期の歌人 「きさかたの 桜は浪に うづもれて 花の上ごとく あまのつり舟」

本紀行における三つのピーク（松島、平泉、象潟）、この旅におけるめあてであった象潟を訪ねたあと、芭蕉一行は、6月18日、酒田に戻った後24日まで滞在、25日に酒田を後にし北陸路へ。

6月18日 酒田 江戸より 1,192km 象潟から 38km 私の記録： 年 月 日  
江戸から 1,192km、出羽路完、全行程 600里 2,400km の半分の行程を 84日、馬や舟にも乗っているが、一日平均 14km 移動したことになる。休息もかなり取っているため、30km 程度か

文中挿入した写真・図はすべて無料画像を使用しています。 その3 完